No.1225　インコの胸腔内腫瘤　麻布大学

【動物】オカメインコ、雌、1 歳 9 ヵ月

【臨床症状】呼吸器症状を主訴に動物病院を受診。抗生剤による治療を行うものの、治療への反応は乏しく、呼吸器症状の悪化と体重減少がみられた。初診から 20 日後に死亡。

【剖検所見】右肺を背側に圧排し、右胸腔を占拠する 4 ×2.5cm 大の腫瘤を認めた。腫瘤の割面は白桃色充実性を呈した。

【診断】

病理組織学的診断：核内封入体の形成を伴う組織球性胸膜炎

疾病診断：ポリオーマウイルス感染症

腫瘤は淡明な細胞質と膨化した大型の核を有した多形の細胞と、その周囲に浸潤した多数のリンパ球によって構成されていた。多形細胞は大小不同であり、核膜濃染様の細胞が散見され、フォイルゲン反応で弱陽性の封入物を認めた。また、気嚢及び肺の漿膜に沿って同様の細胞構成からなる小病変を複数認めた。

腫瘤を構成する多形細胞は抗 Vimentin3B4 抗体、抗 Iba-1 抗体及び抗 lysozyme 抗体に陽性、抗 PCNA 抗体に一部で陽性であり、抗 CytokeratinAE1/AE3 抗体、抗 p63 抗体及び抗汎 Aviadenovirus 抗体に陰性であった。

腫瘤からは、ヘキチョウポリオーマウイルス 1 に類似する遺伝子配列が検出され、*in situ* hybridization において、多型細胞の核内にポリオーマウイルス遺伝子の陽性シグナルが検出された。

【考察】本症例は特徴的な核内封入体の形成と病原体検索の結果から、ポリオーマウイスル感染による病変であると判断した。本症例は既報の鳥ポリオーマウイルスのプライマーでは検出されず、VP1 領域における相同性解析から新規のポリオーマウイスルであることが示唆された。研修会では腫瘍性病変か炎症性病変か議論されたが、主構成細胞であるマクロファージに分裂像が確認されず、PCNA における増殖活性も低かったことに加え、様々の程度にリンパ球浸潤を伴い、気嚢壁または肺の漿膜側に沿って小病変を形成していることから、気嚢に沿って形成された組織球性炎症病変と判断した。オカメインコでは類似の組織形態を示す肺腫瘤が腫瘍として報告されている。この報告では腫瘍から鳥ポリオーマウイルス遺伝子が検出できなかったとしているが、本例でも既報のプライマーでは検出できなかったことを考慮すると、オカメインコ特異的なポリオーマウイルス感染による同質の病変を捉えている可能性も考えられる。（相原尚之）

参考文献：Garner, M. M., Latimer, K. S., Mickley, K. A., Ritzman, T. K. and Nordhausen, R. W. 2009. Histologic, immunohistochemical, and electron microscopic features of a unique pulmonary tumor in cockatiels (Nymphicus hollandicus): six cases. *Vet. Pathol.* **46**: 1100-1108.